

パラノイド傾向が怒りに及ぼす影響について

—パラノイド傾向者はどのように怒りを感じているのか—

久場 美南子

About the Influence that a Paranoid Tendency Gives to Anger —How Does a Person with Paranoid Tendency Feel Anger—

Minako KUBA

【要旨】パラノイド傾向とは被害者意識を強く感じる傾向が強いということであり、先行研究ではパラノイド傾向のあるものは他者に攻撃的に見られやすいとしている。そこで本研究では、パラノイド傾向者がどのように悪意を認知し、怒りを喚起させているのか、そしてその表出方法を明らかにすることを目的として研究を行った。その結果、パラノイド傾向者は最近あった怒り場面を思い出させた場合、その時の怒りの程度に大きな差は見られなかったが、怒りの表出方法に関して理性的な説得を行う一方で直接非言語的攻撃を行うことが示された。また場面想定法による怒り反応の検討の結果、出来事や悪意の帰属、被害者意識に違いが見られ、パラノイド得点が高いほど、自分が加害者の場面で怒りを喚起しやすく、自分が被害者だと捉える傾向があった。そして高パラノイド傾向者は、相手の反応を悪意に捉えやすく、出来事の原因を不当なものと感じやすいことが示された。

問題

怒り感情が及ぼす影響

私たちは、普段の生活の中で他者に対して怒りを抱くことが多々あるが、通常はあまり表に出さないように個人内で統制される。しかし、感じてしまった怒りは確実に個人の中に感情として残り、葛藤が生まれることもある。また、感情を確実に量る指標というものは存在せず、感情とは自分の中に確かに存在するものではあるが、他者の感情を推測するとなるとさらに難しいものである。感情の中でも特に怒り感情は他者に攻撃的に捉えられやすく、対人関係においては否定的なものとして扱われることが多い。一般に怒り感情はあまり表出せずに抑制すべきものと考えられ、私たちの概念として息づいている。さらに、日本人は他者に対して怒りの表出を抑制することが指摘されている (Argyle, et. al., 1986)。

しかし、怒りは必ずしも抑制することが対人関係においてよい結果をもたらすわけではない。特に臨床的な立場からは、怒りの過度の抑制は個人にとって必ず

しも望ましいものではないという指摘もある。怒りを表出しないことが対人関係を疎遠にしたり、心身症を引き起こしたり、対人認知をゆがませたりと、時にはむしろ好ましくない結果をもたらすことがある (Holt, 1970)。したがって、適切に怒りを表出することが、対人関係の形成・維持において重要な問題となりうる考えられる。さらに怒りの適切な表出方法により、他者との間に共感や相互理解および対人間の信頼や親密さが深まる (e.g., Holt, 1970) ともいわれており、このような適切な怒りの表出には建設的な側面もある。

以上のように怒りの性質は様々で、人が独自に感じる感情という面では、非常に定義しにくいものである。そこで本研究では『怒り』を、「対人関係において相手または自分に不快な気分をもたらす感情」と定義する。このように定義することによって必ずしも攻撃行動までは至らない、対人関係に絞られた怒りを定義できていると考えられる。さらにその怒りの表出・統制の仕方によって、怒りは適切か不適切かに分けられるだろう。

さて怒りは多くの場合、知覚された不正に対する感情的反応である。不当な扱いを受けたとか、侮辱されたとか、当然の権利を侵害されたと感じたとき、怒りの感情が起る。しかし、不正の知覚は主観的なものなので本人は自分の怒りが正当と思っても、他の者はそう思わない事もある。つまり、怒り経験には大きな個人差があると考えられる。

近年、「キレル」という行動が不適切な怒りの表出方法として問題となっている。このような突発的・衝動的な怒りの表出に、教育やカウンセリングの対応においても対処すべき課題となっている。この問題はまた、昨今指摘されている少年犯罪の凶悪化の問題とも絡みながら、「青少年の暴力や攻撃性」として、日本社会が抱える重要な課題のひとつとなっている。ただ、早急かつ適切な対応が求められるものの、暴力や攻撃性を促進（抑制）する要因には、無数に挙げることができ、その要因をどこに求めるべきかについて多くの議論が交わされている。怒り感情もその要因のひとつであり、怒り感情の特徴を知ることは、この問題を解決していくひとつの手がかりとなるであろう。

個人内特性としてのパラノイド傾向

怒りやすさ・攻撃行動を促進する要因のひとつとして、パーソナリティなどの個人特性は欠かすことができない。個人の怒りの水準は、生物学的に体内の自律神経系や内分泌の特性による反応のしやすさで決定されたり、先天的な心理・生理的反応に関する反応性（しやすさ）などがある（Stemmler, 1992）。また一方では、怒りに関する「特性的概念」も考えられている。つまり、人格特性としての「特性－怒り」は、様々な状況で怒りを誘発するものとして知覚する傾向であり、その傾向の強い人は、強い「状態－怒り」でもって当面する挑発に反応する傾向があると考えられる（Spielberger, et. al., 1983）。つまり、怒りやすい人格特性と、そうではない人格特性が存在するという考え方である。

人格特性のひとつとして、感情的な反応のほかに、認知スタイルも重要な側面である。多くの攻撃は危害を加えられたとき、または危害を予期したときに対する反応であるが、人間の場合には、攻撃反応は原因帰属や解釈など個人の認知過程に強く影響される。同じ被害（例えば、待ちぼうけなど）を受けても、それを悪意の表れと解釈するかどうかで攻撃反応および感情は大きく違ってくる。解釈に個人差があれば、それは攻

撃反応の個人差の原因をもたらす。

このように、人の言動の背後に自分に対する敵意や悪意を推測してしまうことを一般にパラノイド認知とよぶ。そしてこうした傾向の強い人々をパラノイド傾向者と呼ぶ（大淵, 1984）。

ここで、「パラノイド」という概念に関して、滝村（1991）は「他者の悪意を知覚しやすい傾向という、一つの人格特性を指すもの」と定義している。パラノイドは精神医学の分野において、病的な精神症状、あるいは病的な人格障害を表わす言葉として用いられてきた。ここで確認しておきたいのは、パラノイド傾向と病的パラノイドとは非常に関連が深い、まったく同じものではないという事である。Reiss, et. al. (1977)によれば、病的パラノイドの中核的特徴は、「過度の猜疑心」と「根深い対人不信」としている。私たちの生活の中で、このような特徴を持つ人は少なくない。つまり、他者に対して疑い深く、対人不信傾向の強い人々のことである。反面、このような特徴をまったくもたない人も存在し、一時的にこの特徴が現れる人もいる。しかも、パラノイド傾向の特徴は持続的に現れると対人行動に対して悪影響を与えうることも考えられる。そこで、病的パラノイドに関連性の深いこれらの特徴はひとつの病気と診断せずに、ひとつの人格特性とみなすこともできるのではないかと。つまり、本研究でパラノイド傾向と呼ばれているものを「他者に対して不適切に悪意の帰属を行う性質」と定義し、必ずしも病的でない人格特性のことを指すこととする。

誰でも一時的にはパラノイド認知に陥ることがある。何か恥ずかしいことをした直後は、周りの人が自分をあざ笑っているような気持ちになったり、人が2～3人集まっておしゃべりをしているのを見ると、自分の悪口を言っているのではないかとひがんだ気持ちになることである。しかし、特性的にパラノイド傾向の強い人々も確かに存在する。こうした人々は他者の言動を邪推しがちなので、人間関係に誤解を生じさせたり些細なことから深刻な対立を招いたりする。それだけでなく、パラノイド傾向者は、自分が被害者の時には加害者の非常に強い悪意を帰属したが、自分に無関係な出来事についてはそうではなかった（Dodge, & Frame, 1982）。つまり、人間自体が敵意や悪意を皆持っており誰もが人に悪意を抱いているという完全な人間不信な状態にあるのではなく、自身に関する出来事が起こったときに自分が個人的に敵意を向けられていると感じる被害者的な認知スタイルなのである。

パラノイド傾向と怒り感情との関連

パラノイド傾向はもともと持って生まれたものではなく、社会生活のなかでその人の中に育まれてきたものであり、作り上げられてきた個人内の特性である。つまり、パラノイド研究を進めることにより、作り上げられた人格特性の特徴を知り、パラノイド傾向者の怒り（攻撃）統制トレーニングの一環となる資料が得られると考えられる。怒りに関わる問題への対応として、認知的再構成や社会的スキル訓練を組み込んだ教育プログラムの開発が進められている（e.g., Larson, 1994）。予期や帰属のスタイル、注意焦点づけの特徴による怒り喚起を問題とするなら、認知的再構成を中心にプログラムを構成する（e.g., Navaco, 1976）。一方、対人コミュニケーションに関わるスキルの欠如によって引き起こされる怒りや攻撃的な表出を問題とするなら、主張訓練などの社会的スキル訓練を中心にプログラムを構成する（e.g., Morrison & Sandwicz, 1994）。パラノイド傾向者には認知スタイル、つまり帰属の方法に問題があると考えられるので、怒りを感じたときにそれをどこに帰属させるのかを知ることにより、新しい視点を組み込んだ教育プログラムの作成が可能になるのではないかと期待できる。さらに、怒りの表出方法を調べる事により、社会的スキルの訓練法を新しく見出す手がかりとなるであろう。

最近では攻撃行動と精神医学的な病的パラノイドの研究が進んではいるが、攻撃行動に現れる以前に喚起される感情としての怒りや、誰もが持ちうるパラノイド認知の強弱と帰属の方法に関する実証的な研究があまり行われていない。パラノイド認知の傾向者と怒り表出の認知・評価との関連を調べる事により、個人の人格特性を大まかに捉え突発的・衝動的な攻撃行動に結びつく怒り感情の統制法を見出す方法を知る手がかりとなるだろう。

以上のことから本研究では、パラノイド傾向者は悪意の帰属の偏りに誤りがあると考えられているため、怒りの認知プロセスはどのようになっているのかを検討することとする。悪意や敵意を感じているのか、それを認知しているのか、個人内でどのような感情の解釈をしているのかを知ることが自身を感じている帰属の偏りの程度を知る手がかりとなるであろう。さらに、攻撃行動に出やすいということは、出来事の認知過程で何かしら怒り感情に影響を与えているのかもしれない。そして、対人関係に影響を与える行動を行っているのかもしれない。そこで、パラノ

イド認知の傾向者と怒り感情の喚起とその表出との関連を見出し、さらに、パラノイド認知の傾向者は自分の怒り表出に関する対人的影響の把握や、怒り表出による評価を如何に行っているかということを検討したい。

方法

(1) 対象者および手続き

大学生174名（男性62名 女性109名 不明3名 平均年齢20.9歳）を対象に質問紙調査を実施した。

(2) 質問紙の構成

パラノイド傾向と怒りの反応について、質問紙は〈質問1〉パラノイド尺度、〈質問2〉怒り喚起場面の想起、〈質問3〉場面想定法による怒り反応、〈質問4〉精神健康調査票と、大きく4つで構成されている。詳細については以下に示す。

〈質問1〉

■パラノイド（PA）尺度

滝村（1991）を参考に、縮小版PA尺度（38項目）を使用した。縮小版PA尺度は対人猜疑心・社会的猜疑心・家庭への不満・教師への反発・仲間はずれの5つの下位尺度から構成されている。

- a) 対人猜疑心因子…他者に対して抱く持続的で一貫した不信感、疑惑感を感じ、相手の言動に示される態度を素直に受け入れず、常に警戒して他者と接する態度を示す。
- b) 社会的猜疑心…対人に加え、社会（政治家・セールスマン・ニュース）に対して不信感・疑惑感を持ち警戒的な構えをもつ態度を表しており、目に見えない「意図」に対する信念である。これは、対人に関してというよりも大人社会に対する不信感を表している。
- c) 家庭への不満…他者としての対象が、「家庭」「父母」「家の人」に向けられ、自分を十分に受け入れてくれないという被差別感と、そのような家庭への不満・敵対心・反抗的な気持ちなどのうらみからなる因子である。
- d) 教師への反発…他者としての対象が学校や教師に向けられた、うらみ・被差別感を示す因子である。
- e) 仲間はずれ…他者としての対象が友達に向けられており、わずかに不信感はあるが、敵意的もしくは反抗的感情はほとんど含まれていない。友達からの迫害・軽視に対する被差別感とさびしさから

の逃避願望を表す。

以上の因子について、各因子が各項目を十分に説明していると判断したため、同様の因子構成を使用することとした。回答は“1=まったく思わない”から“5=強くそう思う”までの5件法で回答を求めた。

■虚構尺度

PA尺度における項目は、一般に反社会的・非適応的内容を示すものが多いため、11項目の虚構尺度を加えた。虚構尺度項目については、MMPIの日本版(1973)を参考に選出し、尺度に加えた。回答は、パノイド質問紙と同様に5件法で行った。

〈質問2〉怒り喚起場面の想起

被験者に最近怒りを感じた出来事について思い出してもらい、そのときに感じた怒りの強さ、怒りの表出方法とその表出に対する自己評価、相手との関係維持をどのように考えていたか、自分をどのくらい被害者だと感じていたかなどについて回答を求めた。

—質問内容—

■怒りの経験時期

最近最も怒りを感じた場面の時期を、1週間以内～半年以上前の4段階から選択

■怒り喚起者

怒りを喚起した人物についての関係と親密度
関係…恋人・家族・好きな知人・嫌いな知人・単なる顔見知り・その他の中からひとつを選択
親密度…“1=まったく親しくない”～“7=とても親しい”までの7件法で回答

■怒りの強度

想起した場面で喚起した怒りの強さを、“1=とても弱い怒り”から“7=とても強い怒り”までの7件法で回答

■怒りの表出方法

想起した場面で被験者がその時実際にとった怒りの表出方法(木野, 2000)の程度

- 感情的攻撃…怒りにまかせて相手を責め立てる
- 嫌味…嫌味や皮肉を直接言う
- 表情・態度…表情や口調で怒りを表す
- 無視…何の反応も示さず無視する
- 遠まわし…怒っていることを遠まわしに伝える
- 理性的説得…相手の非を冷静的・論理的に伝える
- いつもどおり…いつもと変わらない態度で接した各表出方法について“1=非常にそうした”、“2=少しそうした”、“3=全くそうした”

の3つから選択

■自分の怒り表出に対する態度

自分の怒りの表出に対してどのよう感じているかについて、“1=間違っていなかったと思う”から“7=間違っていたと思う”までの7件法で回答

■相手との関係維持の意思

怒りの表出時に、相手とこれからも関係を続けていきたいと思っていたかについて、“1=さらに親しくなりたい”から“7=もう関わりたくない”の7件法で回答

■怒り喚起場面での加害者意識

怒り喚起場面において、自分にも反省するところがあったと感じているかについて、“1=非常に反省した”から“7=反省するところはなかった”までの7件法で回答

■怒り喚起再場面での怒り統制願望

今後同じような状況に陥ったときに怒りを統制しようと試みるかについて、“1=同じ事はしないでだろう”から“7=同じようにするだろう”までの7件法で回答

■怒り経験の想起場面での被害者意識

今怒り喚起場面を思い出して、どちらが悪かったと思うかについて、“1=自分がより悪いと思う”から“7=相手がより悪いと思う”までの7件法で回答

■怒り喚起場面での被害者意識

怒り場面のその時にはどちらが悪かったか、と思ったか、“1=自分がより悪いと思う”から“7=相手がより悪いと思う”までの7件法で回答

〈質問3〉統制状況における怒りの喚起

出来事の非が誰にあるのかを操作した仮想場面を3つ用意し、各場面での帰属形態や怒り反応について回答させた。提示した場面の内容についてはTable 1に記す。

[場面1]

どちらが被害者でどちらが加害者なのかがあいまいな場面において、以下の質問を答えてもらった。

1) 怒りの強度

どのくらい強く怒りを感じるのかを“1=まったく怒りを感じない”から“7=強く怒りを感じる”までの7段階で回答を求めた。

2) 怒り喚起場面での被害者意識

どちらが被害者だと感じているかを“1=私に非があると思う”から“7=相手に非があると思う”まで

Table1 〈質問3〉での各統制場面の内容

| | |
|-----|--|
| 場面Ⅰ | あなたは親しい同性の友人と遊ぶ約束をしていましたが、前日になって急用ができてしまいました。悪いと思いつつも急いでいたので、「明日は遊べなくなった」とだけメールを送りました。しかし後日、その友人は私を避けているようで、周囲の友達もなんだか変な目で私のことを見ているような気がします。 |
| 場面Ⅱ | あなたはある飲み会に行きました。夜も更け、終電がなくなってしまい帰る方法がなくなってしまいました。そこで急ぎよ親しい同性の友人に電話をし、迎えに来てもらえるようお願いをしたところ、なんとか引き受けてくれました。しかしいくら待っても親しい友人はなかなか迎えに来ません。何度か電話をしましたが、いっこうにつながりません。冬の寒空のもとずいぶんたってからようやく友人は迎えに来ました。しかし、友人は遅くなってしまったことを謝ろうとはせず、とても不機嫌そうに見えます。そして、車の中ではとても気まずい雰囲気になってしまいました。 |
| 場面Ⅲ | あなたは親しい同性の友人に、一緒に受けていた授業のノートをテスト前に貸してあげました。しかし友人はそれからテスト当日まで学校を休んでしまい、連絡をとることも出来ませんでした。結局あなたはその授業のテスト勉強をすることができませんでした。 |

の7段階で回答を求めた。

- 3) 相手への悪意の帰属 相手から悪意を感じ取るかどうかを聞くために、相手は自分との仲を良くしようと思っていると考えられるかどうかを“1=仲直りしたいと思っていると思う”から“7=もう仲直りしようとは思っていないと思う”までの7段階で回答を求めた。

[場面Ⅱ]

自分が加害者だと感じるような場面において以下の質問に答えてもらった。

- 1) 怒りの強度
どのくらい強く怒りを感じるのかを“1=まったく

怒りを感じない”から“7=強く怒りを感じる”までの7段階で回答を求めた。

- 2) 怒り喚起場面での被害者意識

どちらが被害者だと感じているかを“1=私に非があると思う”から“7=相手に非があると思う”までの7段階で回答を求めた。

- 3) 相手への悪意の帰属

相手から悪意を感じ取るかどうかを聞くために、相手は自分との仲を良くしようと思っていると考えられるかどうかを“1=仲直りしたいと思っていると思う”から“7=もう仲直りしようとは思っていないと思う”までの7段階で回答を求めた。

[場面Ⅲ]

自分が被害者だと感じるような場面において、以下の質問に答えてもらった。

- 1) 怒りの強度

どのくらい強く怒りを感じるのかを“1=まったく怒りを感じない”から“7=強く怒りを感じる”までの7段階で回答を求めた。

- 2) 相手に対しての意図性への帰属程度

相手は意図があつてわざとそのようなことをしたのかを“1=きっと忘れていたと思う”から“7=きっと覚えていたと思う”までの7段階で回答してもらった。

- 3) 動機の正当性の評価

何か正当性のある動機があつたと考えるのかどうかを“1=私は「何か理由がある」と思うだろう”から“7=私は「たいした理由はなかった」と思うだろう”の7段階で回答を求めた。

- 4) 状況に対する制御可能かどうかの評価

制御可能だったのか否かをどう判断するかを、“1=きっと強くそう思うだろう”から“7=きっと全くそうは思わないだろう”までの7段階で回答してもらった。

- 5) 相手への悪意の帰属

相手から悪意を感じ取るかどうかを聞くために、相手は自分に対して悪いと思っているかどうかを“1=相手はきっと悪かったと思っていると思う”から“7=相手はきっと悪かったと思っていないと思う”までの7段階で回答を求めた。

- 6) 怒り喚起場面での被害者意識

どちらが被害者だと感じているかを“1=私が悪かったからだと思う”から“7=相手が悪かったからだと思う”までの7段階で回答を求めた。

〈質問4〉GHQ精神健康調査票

最近の精神状態について健康であったかどうかを尋ねた。オリジナルのGHQ（中川，1996）から、選定された4要素のスケールを参考に、身体的症状・不安と不眠・社会的活動障害・うつ状態の28項目を引用した。回答は4段階で当てはまるものを選択してもらった。

結 果

PA尺度は一般的に反社会的な項目を多く含んでいる。そのため、集計に際しては回答バイアスについての一定の配慮が必要とされた。そこで虚構尺度が6点以上の対象者は質問に対して偏った回答を行っているとして判断し、分析からは除外した。その結果、最終的な分析対象者は159名（男性58名 女性99名 不明2名 平均20.5歳 SD=2.51）となった。

また、これら対象者の個々のPA尺度得点を算出した後、その平均値を中央値で折半し、パラノイド傾向の高低群を設定した。

(1) 怒り喚起場面の想起法による怒り反応の検討

■パラノイド高低者における怒り反応の相違

被験者に最近怒りを感じた出来事について想起してもらい、そのときに感じた怒りの強さ、怒りの表出方法とその表出に対する自己評価、相手との関係維持を考えていたか、自分をどのくらい被害者だと感じていたかなどについて回答を求めた。

その結果、怒りの強度に関しては若干低パラノイド傾向者のほうが平均値は高かったが（高(1.28) < 低(1.58), $p=.23$ ）、t検定での有意な差は見られなかった。しかし、そのときの自分の行動に間違いがあったと思うかを聞いてみたところ、高パラノイド傾向者は低パラノイド傾向者に比べ、怒りの表出に対して自分には非がないと思っていることが示された（高(2.91) < 低(3.43), $p<.05$ ）。また、今回怒りの表出方法に関して木野（2000）の日本人の怒りの表出方法（7項目）を引用しているが、その7つの表出方法について違いがあるのかを検討したところ、パラノイド高低群に有意な差は見られなかった。そこで、7つの表出方法を直接的攻撃（言語的・非言語的）と非攻撃反応（いつもどおり・理性的説得）に分類できると考え、3つの表出方法とパラノイド高低者の得点を比較した（Table 2）。t検定の結果、高パラノイド傾向者のほうが直接非言語的攻撃と非攻撃行動を行うことが示された。

■パラノイド下位得点と怒り反応との関連

PA尺度は5つの下位尺度から成っており（対人猜疑心・社会的猜疑心・家族への不満・教師への反発・仲間はずれ）、その各下位尺度得点と怒りの表出方法との相関をTable 3に示す。下位尺度では、仲間はずれと表情口調・無視との間に相関が見られ（ $p<.05$ ）、さらに3つの怒り表出方法と各下位尺度得点との関係を性差で調べた結果、男性では全体的に相関は見られなかったが、女性では対人猜疑心と仲間はずれが高いほど非攻撃行動（ $p<.01$ ）や直接言語的表出方法（ $p<.05$ ）を行っていることが示された。

(2) 場面設定法による怒り反応の検討

【場面Ⅰ】

■非があいまいな場面でのパラノイド高低者の怒り反応の相違

怒りの強度、被害者意識、相手への悪意の帰属程度とパラノイド高低者に違いがあるのかを検討した結果、悪意の帰属について有意な差が見られた（低(3.61) < 高(4.16), $p<.05$ ）。

■パラノイド下位得点と怒り反応との関連

パラノイド下位尺度と怒りの強度、被害者意識、悪意の帰属との相関を性差で調べた結果をTable 4に示す。男性では対人猜疑心と被害者意識・相手への悪意の帰属に正の相関が見られ、仲間はずれと被害者意識に正の相関が見られた。女性では、対人猜疑心・家族への不満・仲間はずれと怒りの強度、社会的猜疑心と被害者意識に相関が見られた。

【場面Ⅱ】

■被験者が加害者の場面でのパラノイド下位得点と怒り反応との関連

怒りの強度、被害者意識、相手への悪意の帰属程度とパラノイド高低者に違いがあるのかを検討した結果有意な差は見られなかったが、パラノイド得点と怒りの強度（ $r=.227$, $p<.01$ ）、被害者意識（ $r=.183$, $p<.05$ ）との間に相関が見られた。また、下位尺度と性差での関連を調べた結果、男性では対人猜疑心・家族への不満・仲間はずれが高いほど怒りを高く喚起し、さらに家族への不満が高いほど相手へ悪意を帰属する傾向が見られた（Table 5）。

【場面Ⅲ】

■自分が被害者の場面でのパラノイド高低者の怒り反応の相違

怒りの強さ、意図性への帰属程度、動機の不当性へ

Table 2 怒りの表出方法とパラノイド高低との比較

| | 直接的攻撃 | | 非攻撃行動 |
|-----------|-----------|------------|------------|
| | 言語的 | 非言語的 | |
| PA尺度 高 88 | 1.52(.48) | 1.81(.49)* | 2.69(.49)* |
| 低 71 | 1.44(.45) | 1.64(.54) | 2.34(.49) |
| | *p<.05 | | M(SD) |

Table 3 パラノイド得点と怒りの表出方法における性差

| | 男性 | | | 女性 | | |
|--------|-------|------|-------|--------|------|---------|
| | 直接的攻撃 | | 非攻撃行動 | 直接的攻撃 | | 非攻撃行動 |
| | 言語的 | 非言語的 | | 言語的 | 非言語的 | |
| 対人猜疑心 | .07 | .22 | .13 | .25* | .16 | .33** |
| 社会的猜疑心 | -.08 | .02 | .25 | .09 | .06 | .08 |
| 家族への不満 | .19 | .04 | .16 | .10 | .08 | .00 |
| 教師への反発 | .12 | .09 | .30* | .14 | .17 | .15 |
| 仲間はずれ | -.03 | .30* | .14 | .21* | .18 | .46** |
| PA尺度 | .09 | .23 | .24 | .25* | .19 | .33** |
| N | 57 | 57 | 58 | 97 | 96 | 98 |
| | | | | *p<.05 | | **p<.01 |

Table 4 [場面I]での場面想定法による怒り反応の性差

| | 男性 | | | 女性 | | |
|--------|-------|-------|-----------|--------|-------|-----------|
| | 怒りの強度 | 被害者意識 | 相手への悪意の帰属 | 怒りの強度 | 被害者意識 | 相手への悪意の帰属 |
| 対人猜疑心 | .14 | .28* | .31* | .22* | -.09 | .12 |
| 社会的猜疑心 | .00 | .10 | .24 | -.07 | -.21* | .06 |
| 家族への不満 | -.10 | .05 | .22 | -.22* | -.14 | .12 |
| 教師への反発 | -.24 | .07 | .09 | .13 | -.17 | .18 |
| 仲間はずれ | .16 | .27* | .21 | .20* | -.02 | .14 |
| PA尺度 | .05 | .27* | .34* | .13 | -.15 | .17 |
| N | 58 | 58 | 58 | 99 | 99 | 99 |
| | | | | *p<.05 | | |

の帰属程度、制御能力への帰属程度、相手への悪意の帰属、被害者意識とパラノイド高低者との違いを検討した結果、動機の不当性への帰属（低(3.1)<高(4.1), p<.01)と悪意への帰属（低(5.09)<高(4.1), p<.05)について有意な差が見られた。

■パラノイド下位得点と怒り反応との関連

下位尺度得点と性差での相関を見た結果、男性では全体的に相関は見られなかったが、対人猜疑心と動機の不当性への帰属・悪意の帰属についてのみ相関が見られた。反対に女性では、対人猜疑心と怒りの強度・動機の不当性への帰属・制御能力への帰属・被害者意識と相関が見られ、社会的猜疑心と怒りの強度・被害者意識、教師への反発と被害者意識、仲間はずれと怒りの強度・動機の不当性への帰属との間に相関が見られた (Table 6)。

(3) パラノイド傾向と精神健康度との関連について

パラノイド高低者と精神的な健康状態 (GHQ調査票) との間に違いがあるかを検討した。その結果、低パラノイド傾向の方が精神健康度は有意に高かった (高(14.2)<低(18.7), p<.05)。しかし、全体的にはGHQ調査票の基準とする12点を超過しており (N=151, M=16.15, SD=6.74)、一般的に精神健康度は達しているが、パラノイド傾向者の高低に著しい差が示された。

また、下位尺度を含めたパラノイド得点と精神健康度の間にも負の相関が見られた。その結果をTable 7に示す。それは男性も女性も同じように相関が見られ、パラノイド傾向と精神健康度との間に強い関連があることが示された。

Table 5 [場面II] での場面想定法による怒り反応の性差

| | 男 性 | | | 女 性 | | |
|--------|-------|-------|-----------|-------|-------|-----------|
| | 怒りの強度 | 被害者意識 | 相手への悪意の帰属 | 怒りの強度 | 被害者意識 | 相手への悪意の帰属 |
| 対人猜疑心 | .27* | .13 | .01 | .22* | .19 | .00 |
| 社会的猜疑心 | -.04 | .13 | -.01 | .09 | -.05 | .15 |
| 家族への不満 | .31* | .20 | -.35** | -.12 | -.09 | .10 |
| 教師への反発 | .22 | .22 | .11 | .04 | -.02 | .18 |
| 仲間はずれ | .42** | .33* | -.07 | .04 | .02 | -.04 |
| PA尺度 | .36** | .25 | -.06 | .13 | .08 | .07 |
| N | 58 | 58 | 58 | 99 | 99 | 99 |

*p<.05 **p<.01

Table 6 [場面III] での場面想定法による怒り反応の性差

| | 男 性 | | | | | | 女 性 | | | | | |
|--------|------|------|-------|------|------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|
| | A | B | C | D | E | F | A | B | C | D | E | F |
| 対人猜疑心 | .04 | .03 | .37** | -.20 | .29* | .13 | .30** | .08 | .36** | -.23* | .30 | .29** |
| 社会的猜疑心 | -.07 | -.14 | .00 | -.09 | .15 | .07 | .23* | .09 | .00 | .02 | .13 | .21* |
| 家族への不満 | -.10 | .02 | .02 | -.01 | .08 | -.05 | -.12 | -.06 | .13 | -.09 | .01 | -.02 |
| 教師への反発 | -.19 | -.16 | .08 | -.05 | .17 | -.04 | .17 | .00 | .18 | -.08 | .19 | .22* |
| 仲間はずれ | .15 | -.06 | .25 | .02 | .25 | -.09 | .21* | .14 | .23* | -.14 | .11 | .19 |
| PA尺度 | -.01 | -.04 | .30* | -.14 | .30* | .05 | .26** | .08 | .32** | -.20* | .25* | .27** |
| N | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 58 | 98 | 98 | 98 | 98 | 98 | 98 |

A. 怒りの強度 B. 意図性への帰属 C. 動機の不当事への帰属 D. 制御能力への帰属 E. 悪意の帰属 F. 被害者意識

*p<.05 **p<.01

Table 7 パラノイド傾向と精神健康度との関連

| | 精神健康度 | | |
|--------|--------|--------|--------|
| | 全 体 | 男 性 | 女 性 |
| 対人猜疑心 | -.38** | -.38** | -.37** |
| 社会的猜疑心 | -.25** | -.31* | -.21* |
| 家族への不満 | -.28** | -.34* | -.25* |
| 教師への反発 | -.31** | -.46** | -.20* |
| 仲間はずれ | -.36** | -.37** | -.37** |
| PA尺度 | -.46** | -.52** | -.42** |
| N | 151 | 55 | 94 |

*P<.05 **P<.01

考 察

パラノイド傾向とは病的なものではなく、誰もが持ちうる人格特性である。しかし、その傾向が強ければ対人関係において強い猜疑心や疑惑の目を相手に向けてしまい、それが攻撃行動へとつながり、よりよい対人関係を営むことが困難になると考えられる。そこで、パラノイド傾向の特徴を知り、その認知傾向や攻撃行動へとつながる怒りの表出について明らかにしていくことが怒り統制の一つの方法になると考えられる。

1) 実際の怒り場面でのパラノイド傾向者の怒り反応の特徴

本研究でパラノイド傾向者の特徴を調べた結果、ま

ず実際に怒りを感じた出来事を思い出してその時の怒りの強さとパラノイド高低者の間に差はあまり見られなかった。その理由として、パラノイド傾向とは出来事に対して通常よりも相手に悪意を抱きやすいという特徴を持っているため、怒り喚起場面を想起したときにはもう通常と変わらない感情へと変化していると考えられる。しかし、怒りの表出方法を分類した結果では、高パラノイド傾向者は表情や口調で怒りを表したり、相手を無視するという直接非言語的行動と理性的説得やいつもどおりの態度をとる非攻撃行動をより行うことが示され、怒りを攻撃的に表出するが言語的ではないために抑制しようとしているのが伺える。適切な怒りの表出方法は建設的な一面を持っていると考えられるが、パラノイド傾向者は適切に怒りを表出しているのか、そこに問題があるのではないかと考えられる。しかしそれだけでなく、理性的説得やいつもどおりの態度をとることも示され、パラノイド傾向者は怒りを抑制しているだけではない。それは、質問項目の偏った考えがあったことも一つの理由として挙げられる。理性的説得とは感情的に相手を責め立てはしないが、相手の非を主張するという主張的な態度である。自分が理性的と認識していても実際にはどのように相

手に思われていたかは推測することは難しい。また、いつもどおりの態度といっても相手から見ればいつもどおりに見えていないかもしれない。全体的に高パラノイド傾向者は3つの表出に関して低パラノイド傾向者よりも怒りの表出は高い平均値を示している。そこで、どのような怒りを示したかというよりもどのくらい表出したかが問題になると考えられる。

2) 仮想場面での怒り反応

次に、出来事の非がどちらにあるかを操作した怒りの場面想定法による怒り反応において、パラノイド傾向に強い関連が見られた。パラノイド傾向者は自分に被害を与えられたと認知する場面において、また被害者と加害者があいまいな場面において、より強い被害者意識と相手への悪意を帰属している。しかし、私たちが普段生活をしている中で被害者と加害者がはっきりとしている場面というものは以外に少なく、出来事が起こったときにそれをどう認知するのかは個人によって大きく変わってくるだろう。そこで仮想場面では、『被害者と加害者があいまいな場面』『どちらかというとか加害者の場面』『どちらかというとか被害者の場面』を設定した。

■出来事の非がどちらにあるのかあいまいな場面でのパラノイド傾向の怒り反応の特徴

『あいまいな場面』では、パラノイド傾向が高いほど相手に強く怒りを感じるということがわかった。どちらが被害者なのかを判断できない状況においてパラノイド傾向者は、相手だけが悪いわけではないと考えられるかもしれないが、一時的に感じた相手への悪意はぬぐいきれないということが現れた結果かもしれない。

■出来事の非が自分にある場面におけるパラノイド傾向者の怒り反応

『加害者の場面』においてパラノイド傾向者はより怒りを感じるということが示された。場面の設定が人によって受け取り方が違うかもしれないという問題があるかもしれないが、加害者であるだろうという場面でもより強く怒りを感じるということは対人関係においてもあまりよいものとは考えにくい。それだけでなく相手への悪意を感じることは無いが、そのような場面においてパラノイド傾向者は、自分が被害者だと感じる傾向があるということも示された。それは男女差で著しく現れ、男性のパラノイド傾向者の方がこのような場面では怒りを強く喚起していた。最近問題視されている、青少年の「キレる」ということと関連があるように思われる。自分が加害者の場面で、相手からの悪意を感

じることはないが出来事がありよくない方向へ進んだときに、いわゆる「逆ギレ」をし、自分は被害者であると認知してしまうのである。これはパラノイド傾向者が対人関係を円滑にできないという問題と密接に関連しているものと考えられる。

■出来事の非が相手にあると考えられる場面におけるパラノイド傾向者における怒り反応

また、『被害者の場面』においてはパラノイド傾向者でなくとも怒りを高く喚起する傾向が見られ、それだけでなくパラノイド傾向者は出来事の帰属の仕方に違いがあることが見出された。パラノイド傾向者は自分が被害者だと感じる場面において、相手は出来事に対して、相手はどうせたいした理由は無かったのだろうと感じ取り、より相手へ悪意を帰属しがちであることが示された。さらに、自分が被害者の場面では、注意していれば防げたかもしれないのにもかかわらず、自分は被害を受けたと感じる傾向が示され、パラノイド傾向者はより強く被害者意識を感じているという結果が示された。これには責任帰属の問題があり、相手が意図的に不当な動機で不注意・怠慢から被害を受けた場合には人はより怒りを喚起しやすいとされている。このような出来事に対する帰属がパラノイド傾向者には強く存在し、より怒りを喚起しやすいということが本研究で示されたといえるだろう。

3) パラノイド傾向と精神的健康について

最後に、パラノイド高低者と精神健康度との違いを検討した結果、高パラノイド傾向者は低パラノイド傾向者に比べ、精神健康度が低くなるということが示された。しかし、高パラノイド傾向者の精神健康度の平均値も健康であるという水準を十分に超えており、精神的に健康とされていてもパラノイド傾向が存在するということが新たに明らかとなった。パラノイド傾向とは病的なものではなく、誰もが持ちうるものである。しかし、低パラノイド傾向者と比べ精神的な健康度が低くなるということは病的でなくともパラノイド認知が精神的にも何かしら強く影響を与えていることが伺える。対人関係の形成・維持というのは社会生活を営む中で重要なものであり、誰もが抱える大きな課題である。そこでパラノイド認知が対人関係や社会生活の中で影響を与えるのであれば改善することがよりよい生活の向上に役立つかもしれない。これは、今後パラノイド認知と精神健康状態との研究をさらに進めることにより、精神健康の状態がパラノイド認知の改善の手がかりとなることを示す結果になったであろう。

本研究ではエピソード法によって実際の怒り喚起場面の想起項目を独自に作り上げたため、質問項目の信頼性と妥当性、非対象者の回答の個人差の影響が図れなかったという問題があると考えられる。今後は質問項目をより吟味し標準化された質問項目の作成が必要となるであろう。そして、怒り喚起場面に対する質問項目が少なく、一つ一つの項目で分析を行ったため、回答に対しての解釈に偏りがあり結果に影響が出たのではないかと考えられる。また、対象者が大学生に限られていたため、今後は社会人や発達の段階を加味した比較も必要になってくるであろう。

【総合的考察】

パラノイド傾向者と怒り感情との関連を調べることにより、パラノイド傾向は病的なものではないが個人特性が大きく現れるということが示された。本研究でパラノイド認知が存在することを再認識することができたため、今後の更なる研究により円滑な対人関係の形成・維持、よりよい社会生活の形成に役立つものとなるであろう。感情の認知・表出は私たちの大きな課題であり、抑制とよりよい表出を強調される怒りの感情は、統制の難しい感情である。誰でもあてはまる結果が出たと言い切れるものではないが、傾向を知ることが目に見えず、図ることの困難な感情認知のために参考となる資料になると期待できる結果が出たといえるだろう。

引用文献

- Argyle, M., Henderson, M., Bond, M., Iizuka, Y., & Contarello, A., 1986 Cross-cultural variations in relationship rules. *International Journal of Psychology*, **21**, 287-315
- Dodge, K. A. & Frame, C. L. 1982 Social cognitive biases and deficits in aggressive boys. *Child Development*, **53**, 626-635
- Holt, R. R., 1970 On the interpersonal and intrapersonal consequences of expressing or not expressing anger. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **35**, 8-12
- 木野和代 2000 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響 *心理学研究* **70**, 393-502.
- Larson, J. 1994 Cognitive-behavioral treatment of anger-induced aggression in the school setting. In Furlong, M. & Smith, D. (Eds.), *Anger, hostility. And aggression: Assessment, prevention, and intervention strategies for youth*. Brandon, Vt. : *Clinical Psychology Pub.* Pp. 393-440
- Morrison, G. M. & Sandwicz, M. 1994 Importance of social skills in the prevention and intervention of anger and aggression. In Furlong, M. & Smith, D. (Eds.), *Anger, hostility, and aggression: Assessment, prevention, and intervention strategies for youth*. Brandon, Vt.: *Clinical Psychology Pub.* Pp. 345-392.
- 中川泰彬・大塚郁夫 1996 日本版GHQ精神健康調査票手引(改訂版). 日本文化科学社.
- Novaco, R. W. 1976 Treatment of chronic anger through cognitive and relaxation control. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 681
- 日本MMPI研究会編 1973 日本版MMPIハンドブック. 三京房.
- 大淵憲一・小倉左知男 1984 怒りの経験(1): Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況犯罪心理学研究 **22**, 15-35.
- Reiss, S., Peterson, R. A., Eron, L. D., & Reiss, M. M., 1977 *Abnormality: Experimental and Clinical Approaches*, New York, Macmillan Publishing.
- Spielberger, C. D., Jacobs, G., Russell, S., & Crane, R. S. 1983 Assessment of anger: The State-trait anger scale. In J. N. Butcher & C. D. Spielberger (eds.), *Advances in personality assessment* (Vol.2, Pp. 161-189). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Stemmler, G. 1992 *Differential Psychophysiology: Persons in situations*. Berlin: Springer.
- 滝村美保子 1991 パラノイド傾向と攻撃行動ーパラノイド質問し作成の試み及びパラノイド傾向と非行との関連性の検討ー *応用社会学研究* **1**, 61-79.